支え合いマップづくり

「気になる人」の見つけ方と問題の解き方

木原孝久
住民流福祉総合研究所

本書の読み方

本書は、支え合いマップ作りをする方々のために作成した。マップ作りでは、特に「気になる人」や「気になること」を探そうとする。そこに地域の課題が凝縮されているからだ。

本書は、この中の「気になる人」に限定して、マップ作りでよく浮かび上がる「気になる人」を取り上げ、その人が抱える問題と、解決法の案を提示してある。

「気になる人」はここに紹介した人ばかりではない。もっと他にたくさんいる。ただ、ここで取り上げた事例と類似している場合もあるので、その場合は、これに付け加えていけばいい。

ここで「気になる人」とは、私・木原にとって気になる人であって、読者にとっては特に気にならないという場合もあるだろう。それぞれの福祉観次第で、項目は大きく変わってくるのが自然なのだ。

冒頭で述べているのは、マップを作るとき、そしてそこで「気になる人」を特定しようとする場合、あなたの福祉観次第で変わってくるということである。

もう１つは、どちらにしても、あなたの頭に「気になる人」のイメージが存在しなければ、気になる人は見つかりようがないということだ。探したい相手がいれば、そしてその人のことをマップ作りの中で強く意識すれば、その人はいずれは見つかる。

「気になる人」さがしの２つの原則

⑴「気になる人」かどうかは、あなたの福祉観が決める

「気になる人」とは、あなたの福祉観に照らし合わせて「気になる」のだろう。つまりその人は、あなたがイメージする正しい福祉のあり方にそぐわないのである。

　したがって、万人共通の「気になる人」はいないことになる。あなたはあなたの福祉観から「気になる人」を見つけるのだ。

⑵探したい人がいなければ、「気になる人」は見つからない

「気になる人」を見つけ出すには、マップを作る前に「こういう『気になる人』を探したい」というものが頭にある必要がある。だから、自分が見つけたい「気になる人」のリストを頭の中に作っておいて、マップを開いたら、これらのリストの誰かがいないかと探すのだ。

　例えば、高齢者のみの夫婦で、夫の地域デビューを妻が仕掛けていないかという点に関心があれば、それを探す。まず高齢者のみの世帯を探し、その中から地域デビューをしている人、いない人を分ける。ただ高齢者のみの世帯が何軒あるかだけを知っても、何の意味もない。その中のどういう点に意味があるのかを考えておいて、「地域デビュー」に関心を集中させればいいのだ。

目次

1.一人暮らし高齢者／６

⑴病弱な高齢者／６

⑵超高齢男性／７

⑶引きこもりの高齢者／８

⑷見守られ努力をしていない高齢者／９

⑸認知症の高齢者／１０

⑹息子に引き取られた高齢者／１１

⑺「困った人」と見られている高齢者／１２

⑻ゴミ屋敷／１３

2.高齢者夫婦のみの世帯／１４

⑴夫が引きこもり傾向／１４

⑵班長の役割が重荷になってきた／１５

⑶夫婦ともに要介護／１６

3.介護家庭／１７

⑴介護の負担軽減策／１７

⑵介護者・要介護者の社会参加／１８

⑶要介護者を隠す／１９

⑷要介護の母と息子の２人暮らし／２０

4.施設入所者・利用者／２１

⑴介護施設入所者／２１

⑵老健施設入所者／２２

⑶デイサービス利用者／２３

5.障害者／２４
⑴在宅の重度障害者／２４
⑵精神障害者／２５
⑶障害児／２６

問題の解決策さがし６つのポイント／２７

1.当事者の側から考える／２８
2.当事者の自助努力を応援する／２８
3.互助エリアを充実させる／２９
4.本人の解決努力を尊重／２９
5.住民の解決努力に乗る／２９
6.本人の尊厳を守る解決策か？／３０

1.一人暮らし高齢者

(1)病弱な高齢者

一人暮らし高齢者を探すと、特に気になる人が見つかる。病弱で、病院通い。時々倒れたりなど。が、なぜかこの人について話し合おうという空気がない。やるべきことは、

①ご近所内の本人の友達や世話焼きさん、元看護師などで支援ネットをつくる。
②それにはまず本人が心(家)を開くこと。
支援者を受け入れ、してほしいことを言える。むしろネット作りを本人が主催する。
④病弱でも趣味や学習活動ができるようご近所内にその施設を設ける。

[ご近所には病弱者がたくさんいる]

御覧のように、１つのご近所だけでもこれだけ病弱者がいる。このご近所から公民館に行っている人は、元気な人だけということがわかった。ここから公民館までは 500 メートルあった。

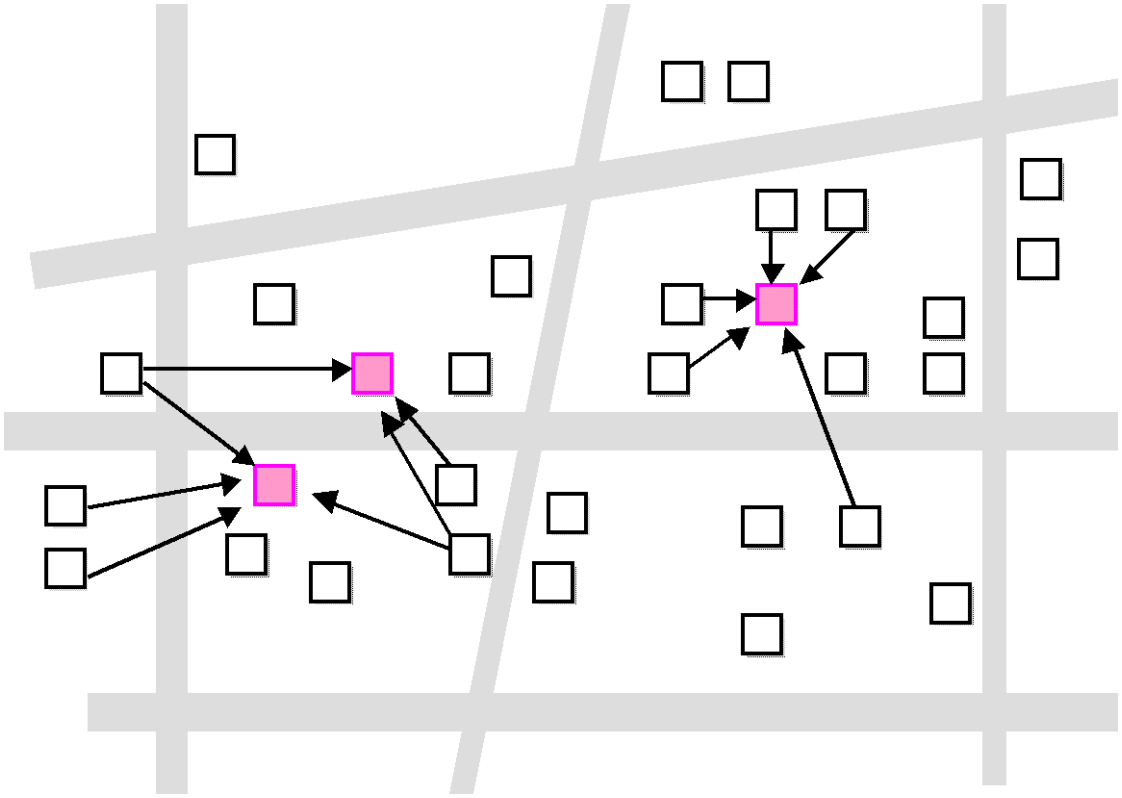
⑵超高齢男性

この年になると問題になるのは、自動車の免許返納。その後、自分ではどこへも行けず、家に閉じこもってしまう。早急に送迎サービスを立ち上げなければならない。

①超高齢者をはじめ、一人暮らしの女性たちのために送迎の体制づくり。
②できる限り、それぞれのご近所内で独自に有志が引き受ける。
③事故の問題があるが、相性の合う者同士の私的な活動で、と理解。

［あの夕張市では、住民が送迎役を引き受けていた］

財政破綻後、電車の廃線などが行われた北海道夕張市でマップを作ったら、以下のように、多くの住民が送迎に協力していた。



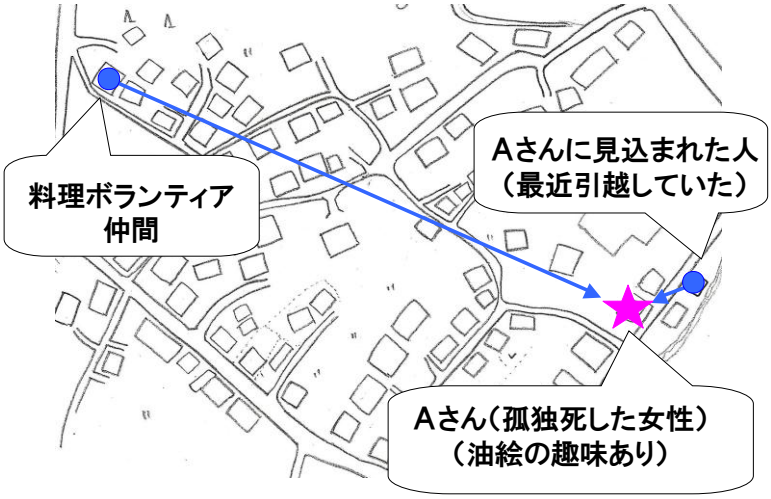
⑶引きこもりの高齢者

引きこもりと言っても、個人差があって、「手に負えない」というような人ばかりでもない。

①どんな引きこもりでも、誰かは見込んでいる。２人はいる可能性がある。
②よく観察すると、何らかの方法で「見守られ」の努力をしている。それを見つけよう。
③本人の趣味など、ここからなら接触できるかもしれなというポイントがある。それを探すことが重要だ。

［孤独死した人も２人は見込んでいた］

死後２週間で発見された女性。誰との接触も拒んでいたと思われていたが、住民によく聞くと、２人は見込んでいたことがわかった。１人には「何かあったら、頼むね」とまで言っていたが、その人が引っ越していた。死後、住民が部屋を覗いてみたら、壁中に自分で描いた油絵がかけられていた。そこから接触していたら…



⑷見守られ努力をしていない高齢者

一人暮らし高齢者の中には、プライバシーを主張して、関わろうとすると「私のことは放っておいて」と言う人が少なくない。これでは自分の身を守ることはできない。引きこもりではないが、孤独死には近い人ということになる。これを変えていく必要がある。

①「夜 10 時まで電気がついていたら気を付けてね」などと本人から見守りをお願いする。
②子ども（息子や娘）がたまに来たら、ご近所の人へ挨拶をしてもらうようにする。
③周囲が見守りやすい方法を工夫する。
④自分もできる範囲で（他の高齢者の）見守りに参加する。

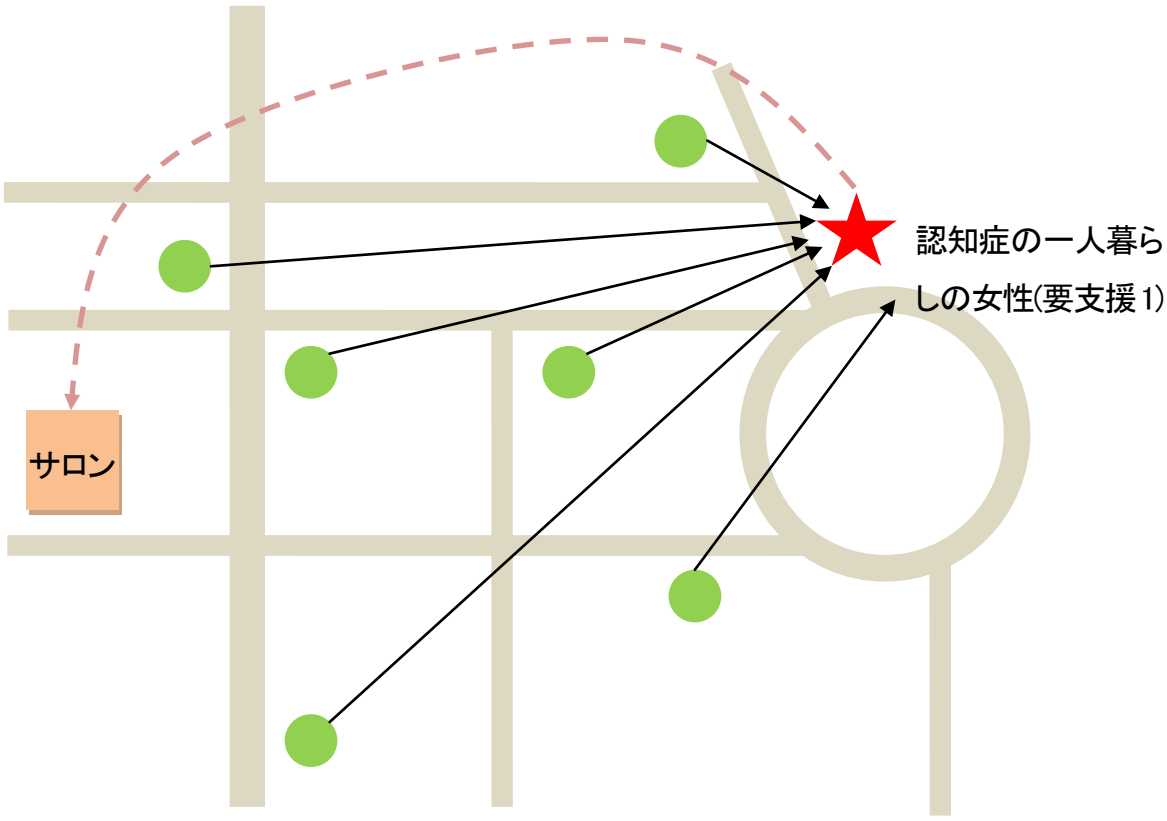
⑸認知症の高齢者

一人暮らしの認知症の女性を見ると、「火事が出ないか」と周りは心配する。しかし何でもできないようにしてしまえば、本人は自分らしい生活が阻まれる。「危ないことをさせない」のでなく、「安全に危ないことができるよう支援すること」が大切だ。

①自宅を開放して、サロンを開く認知症の人もいる。来た人は「見守りがてら」と。
②サロンのメンバーになりながら、細かいところに気を配るのが参加者の役割だ。
③本人が見込んだ家や店を突き止め、そこを居心地のいい場にしてあげるなどの支援をするのもいい。

[認知症の人がサロンを主催していた!]

一人暮らしの認知症の女性が、サロンに参加し、そこで気の合う人を見つけて、わが家で二次会を主催していた。参加者に動機を聞くと、「見守りがてら」と言っていた。本人はサロンを主催するという社会活動をしながら、見守られ上手にもなっていた。



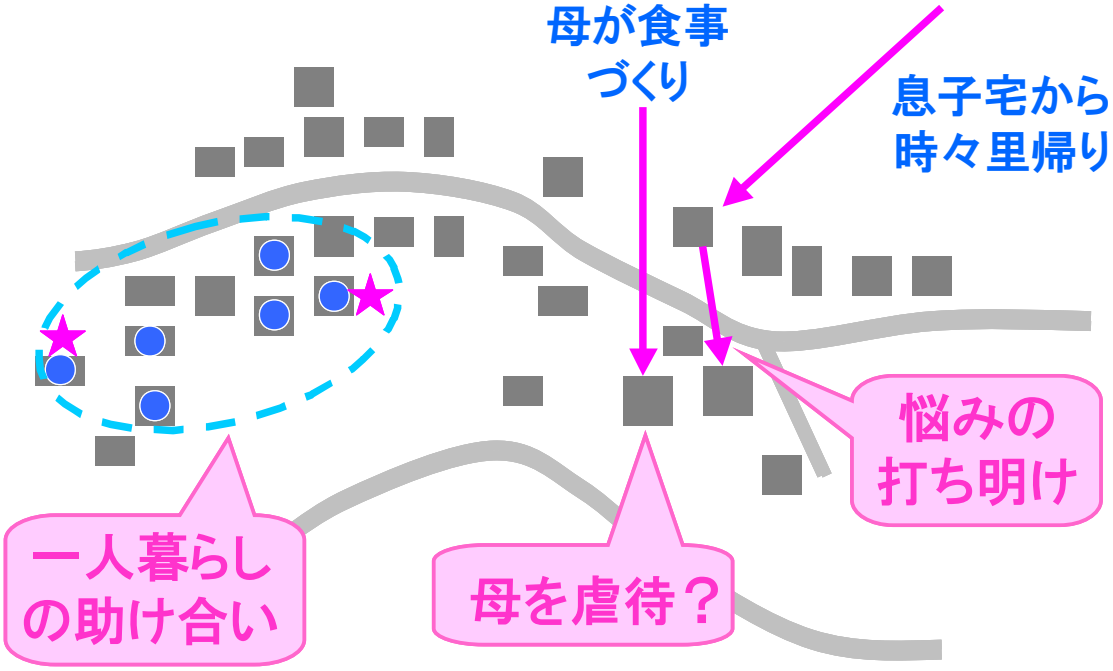
⑹息子に引き取られた高齢者

息子に引き取られた後、その人はどうしただろうか。多くはその後、施設に入所している。家族の介護力に期待できないとわかると、即座に入所になるのだ。

①ぎりぎりまで住み慣れた土地で頑張れるよう、周りで支援する。
②要介護でも支えられるよう、家庭介護経験者や元看護師でネット。世話焼きさんを探せ。
③息子の所に行った後も、体調によっては、元の地域がサロン等に受け入れる。

[息子に引き取られたものの、やっぱり元の土地がいい]

認知症の母を息子が自宅に引き取った。その後本人が、元の家の近くで迷子で発見された。どうしても元の家に戻りたいと抜け出したらしい。そこで、時々、元の家に戻し、地元の人に面倒を見てもらうことにした。



⑺「困った人」と見られている高齢者

　マップ作りの場で、様々な「困った人」が登場する。近隣の人を恫喝する、たくさんの猫や犬を世話もせずに飼う、近所の庭の花をちぎる、周り中の人から借金をする、早朝に押し掛ける、ラジオを大音量で流す、庭木が道路に出張るなど。

①なぜそういうことをしたいのかを相手の側から考えてみる。
②その人が「普通の顔」を見せる機会を探す。怖がられている男性も、子どもには笑顔を見せいていた、など。
③福祉には「悪い人」はいない。いるのは「人間らしく生きることを阻まれた人」。

［住民の集まりや公共施設に来ては無駄口を叩く人］

「本人は寂しいんじゃないのか」とわかり、住民がサロンに受け入れたり、地元の集会に誘っていたら、「落ち着いてきた」ようだという。

⑻ゴミ屋敷

　ちょっと油断をすると、たちまちゴミが山となる現代、だれにもゴミ屋敷になる危険がある。特に、要らない物をため込む人は、たいていゴミ屋敷の予備軍になる恐れがある。いずれにしても、その人によって、関わる方法は変わってくるから、相手の心理・行動を観察しながら、対応の仕方を変えていく必要がある。

①引きこもりと重なっている人も少なくない。それでも〇〇さんなら受け入れる。それが誰かを早めに特定すること。マップを作っていたら、本人がこの人ならと見込んでいる人が見つかった、という場合もある。
②一度きれいにしても、放置すればまた元に戻ってしまうので、継続的な関わりが必要だ。ワーカーが落下傘的に、どこからかやってきて関与するのは、あまり好ましいとは言えない。
③だから、ご近所の人がこれを担うのに適している。
④相手次第では、半強制的に入り込むことも必要になる。

［下の写真は、ゴミ屋敷の「整理」に協力するご近所さん］

2.高齢者夫婦のみの世帯

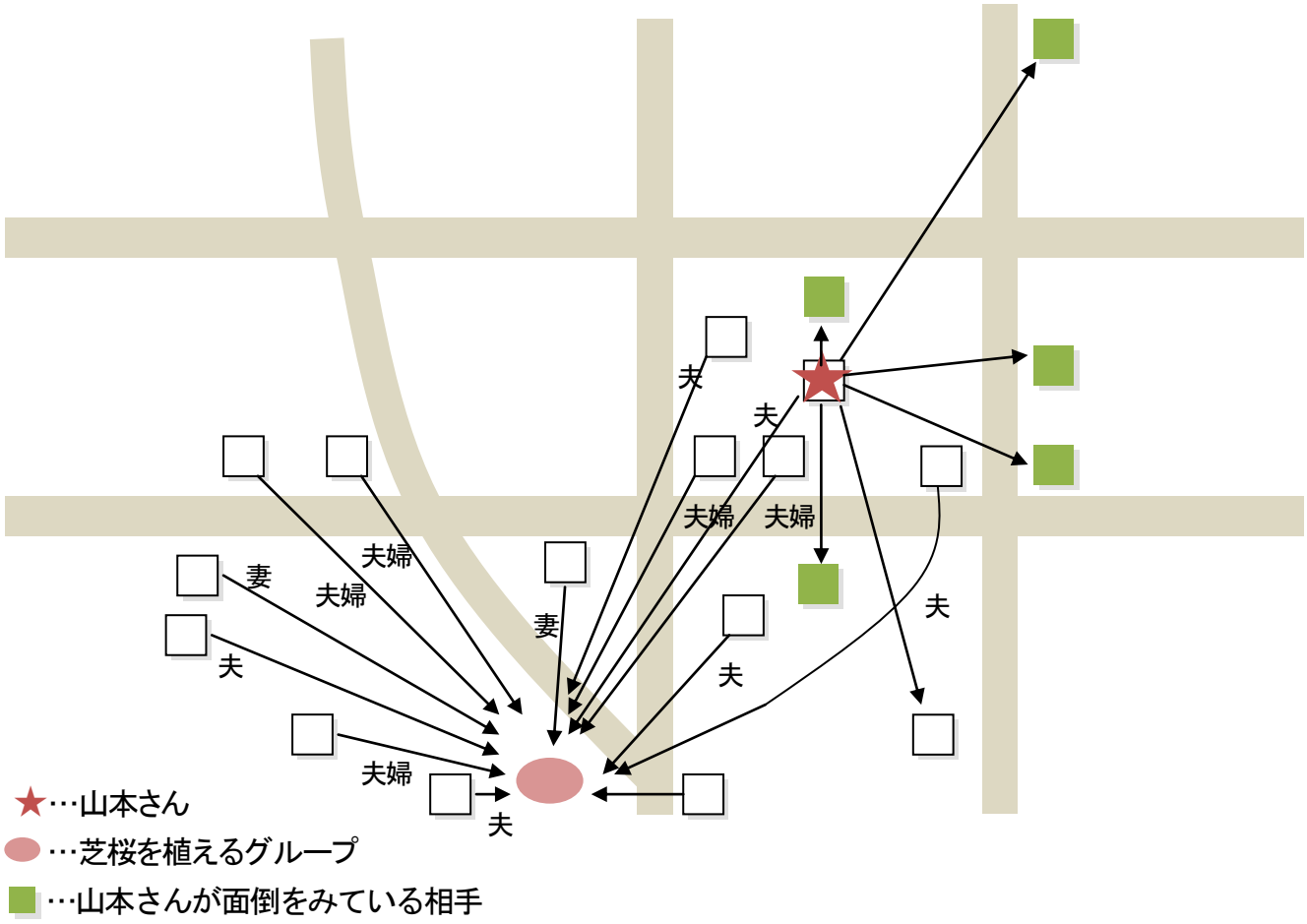
(1)夫が引きこもり傾向

　引きこもりと言っても、心配するほどのことではない。しかし今はいいが、その後妻が要介護になると、夫はきちんと介護をするものの、妻を囲い込む傾向がある。妻の友達が来ても家に入れないなど。介護殺人が起きないか心配だ。

①妻が夫の地域デビューを仕掛ける。熱心な人は 10～20 年も続けている。
②妻と同じグループに加入させる。そうすると妻が要介護になっても、そのグループのメンバーは受け入れる。
③老人会やサロン、趣味グループに、夫婦で参加する。どちらが要介護でも参加。

［「夫婦一緒に参加」を仕掛ける人］

町内会長が働きかけて、芝桜を植える会ができた。狙いは夫婦一緒の参加だ。



⑵班長の役割が重荷になってきた

超高齢化が進行するにつれて、この問題が表面化してきた。〇〇歳になったらパスさせてあげようという人もいれば、いや役割は平等にやってもらわねばと主張する人もいる。子どもがいれば、子どもにやってもらうのだが…

①班長は続けるが副班長を決めて、若手のその人が重荷になる部分は引き受ける。
②「輪番制にしなくても、私がやるよ」という世話焼きさんに引き受けてもらう。
③超高齢化の進んだ地区では、班長の役割を細かく分けて、超高齢者も役を担う。
④世話焼きさんたちでご近所福祉推進体制を作ってしまう。班長も含めて世話焼きさんで。

⑶夫婦ともに要介護

こういうケースの場合、ケアマネジャーなどは大抵、１人を施設に入所させようとする。そうでもしないと、夫婦共倒れになるというのがその理由だ。または、２人とも施設に入所させようとする。しかも夫婦別々に入所という措置もある。しかし夫婦の関係はそんなに単純に考えていいのか。

①基本は２人とも在宅生活を続けられることをめざす。それを地域が支える。
②要介護の夫が要介護の妻を支えるというケースが意外に多い。妻を施設に入所させたら、夫が生きがいを失くしてしまった。
③要介護の夫婦に地域活動をしてもらうという意外なケースもある。以下の通り。

［夫が癌、妻は要介護３。２人にサロン開催を提案］

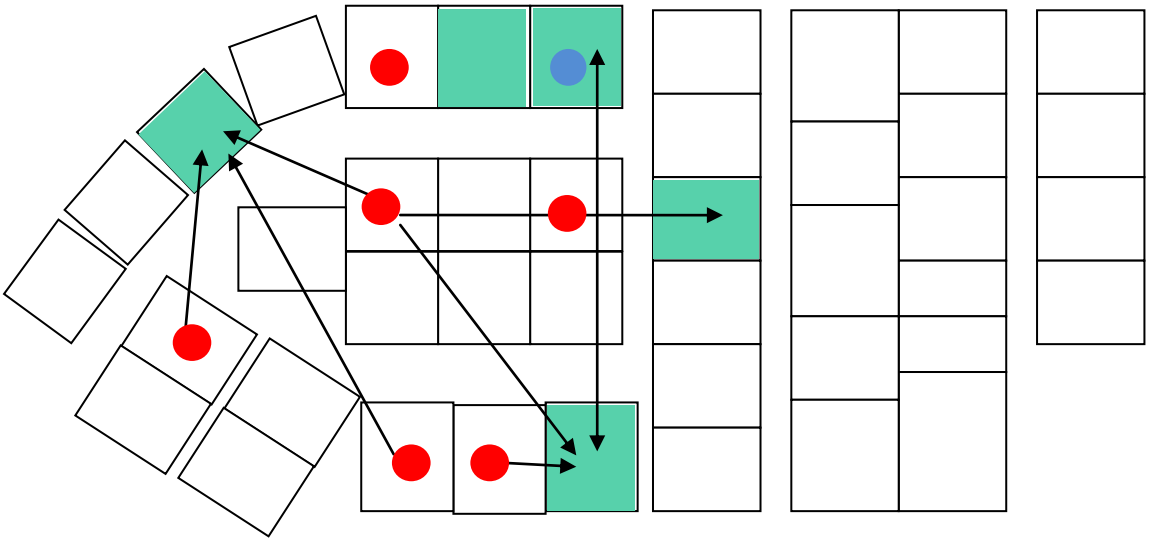
ケアマネジャーは、「妻を施設に」という考えだったが、夫婦は拒否。このケースをＮＰＯ（すずの会・リーダー鈴木恵子さん・写真手前）に委ねたら、妻（写真左から３番目）に自宅でのサロン開催を提案。そこでふれあいが増える。友達も増える。夫婦一緒に活動できる。これで彼女の要介護度が下がってしまい、医者を驚かせた。

3.介護家庭

⑴介護の負担軽減策

介護保険制度はできているが、介護家庭の負担は依然として残っている。今は助け合いを普及させているが、介護まで引き受けられる地域にはまだなっていない。しかしだからこそ、介護を助け合いでできる方法を考えなければならない。最近、ある動きが出てきた。

①介護を地域の人にも担ってもらう。「介護中」の看板を立てる。
②介護の周辺部分ぐらいなら助けてもらえる。
③お返しに、介護の仕方を教える。
④要介護者も、自分なりにできることで参加者にお返しをする。
⑤ご近所内の介護家庭同士が介護で助け合う。
⑥介護経験者や元看護師などがご近所内で連携。介護を始めた人を支援。



…介護中の家庭（線は関わる人）。介護経験者●がサポートしている。
●は元看護師。

⑵介護者・要介護者の社会参加

介護者や要介護者は、ただ日々、介護に専念すればいいというものではなく、それぞれの立場からできる限り社会参加する権利がある。しかし今の段階では、地域のグループは要介護者を仲間に受け入れる気はない。受け入れてもらうには、様々な要件をクリアさせなければならない。

①老人クラブ、趣味グループ、スポーツグループなどが要介護者を仲間に受け入れられるよう努力する。参加の条件、活動の条件を変えていく必要がある。
②ボランティアグループや、サービスグループも、対象者である要介護者も仲間に受け入れるために、その条件整備を検討する。
③そのために、活動者と対象者に区分けするのでなく、両者が併せて活動とみなすという新しい意味付けをする。そのことで要介護者や介護者が誇りをもって参加できるようになる。

⑶要介護者を隠す

例えば認知症にしても、いまだにその存在を家族が隠すという問題が消えていない。その一方で、認知症の人の失踪が問題になっている。この問題の背景に、認知症を隠さざるをえない福祉のあり方が潜んでいる。

①マレットゴルフの盛んなある地区では、広大な敷地に豪華な施設を設けている。その技を競う大会で２人の認知症の人が優勝した。ほかの高齢者が、「俺も、あいつに教わらなくっちゃ！」。その言い方に差別的な感情は入っていなかった。
②認知症の母親を２人の娘が介護している。２人とも元看護師だから、介護は心配ないが、窓に目張りをしていて、引きこもり気味だ。母は以前、踊りの先生で、生徒がたくさんいた。ならばと、イベントで踊りの先生をしてもらえないかと依頼したら喜んで承知した。その後も親子とも地域に参加している。
③彼らに尊厳を守れる立場と活動を提示したら、すんなり受け入れられた。

［元生け花の先生に教室開催を提案したら］

毎日町内を散歩している認知症の女性。散歩をしながら、通りがかった家の中に入って、生け花の手直しをしていた。それならばと、生け花教室を開催したら、写真（右端）のように張り切って参加した。福祉の対象者だからと、対象者にするのでなく、むしろ逆の立場に据えるのだ。

⑷要介護の母と息子の２人暮らし

150 世帯の地域から、このペアを探したら５件見つかった。しかもそのすべてのケースで、息子による虐待があった(内 1 件はネグレクト)。その要介護の母の中には認知症の人もいて、虐待が行われやすい。

①息子の負担が重すぎないか。と言っても、周囲の支援を断るから関わりは困難。
②介護グループが開くミニデイに、息子と一緒に引き込むやり方がうまくいっていた。息子の支援も。
③ミニデイの場で(要介護の母を抱える)息子の会ができている。
④息子の仕事探しを支援する。その前に本人の特技を聞き出す。

4.施設入所者・利用者

⑴介護施設入所者

今の関係者は、施設に入所したら「一件落着」と思ってしまう。だからその人から気になることは出てこない。しかしそれでいいのか。

①「里帰り」は、なぜできないのか。家族が反対する場合、知人宅への里帰りが広がっている。
②施設入所者は、なぜ老人会に入れてもらえないのか。敬老会になぜ出席できないのか。
③施設によっては、積極的に入所者を地域グループに参加させている。

［民生委員が仲介して、重度障害者宅に里帰り］

半身不随になった一人暮らし高齢者が、どうしても家に帰りたいということで、民生委員が仲介して実現した。その家に今は、老人ホームの入所者が夫婦で、しかも毎月、里帰りしている。半身不随のその女性が歓迎して受け入れているのだ。その家はまた、要介護者のサロンの会場にもなっている。

⑵老健施設入所者

老健施設と言えば、中間施設。自立ができれば自宅復帰が可能ということになっているが、それが実現したという話はあまり聞かない。老健施設の所長たちに、「本当に家に帰したいと思ったら何をしますか？」と聞いてみたら、予想通りの返事が返ってきた。「時々家に帰してみる」である。それさえもやる気はないということか。

①老健施設に入所する人は、自宅に近い施設に入所する。
②自立へ向けてのプログラムを施設と協議する。
③自宅復帰したら、施設に戻ることにならないように、関係者や地域の人たちと協議する。

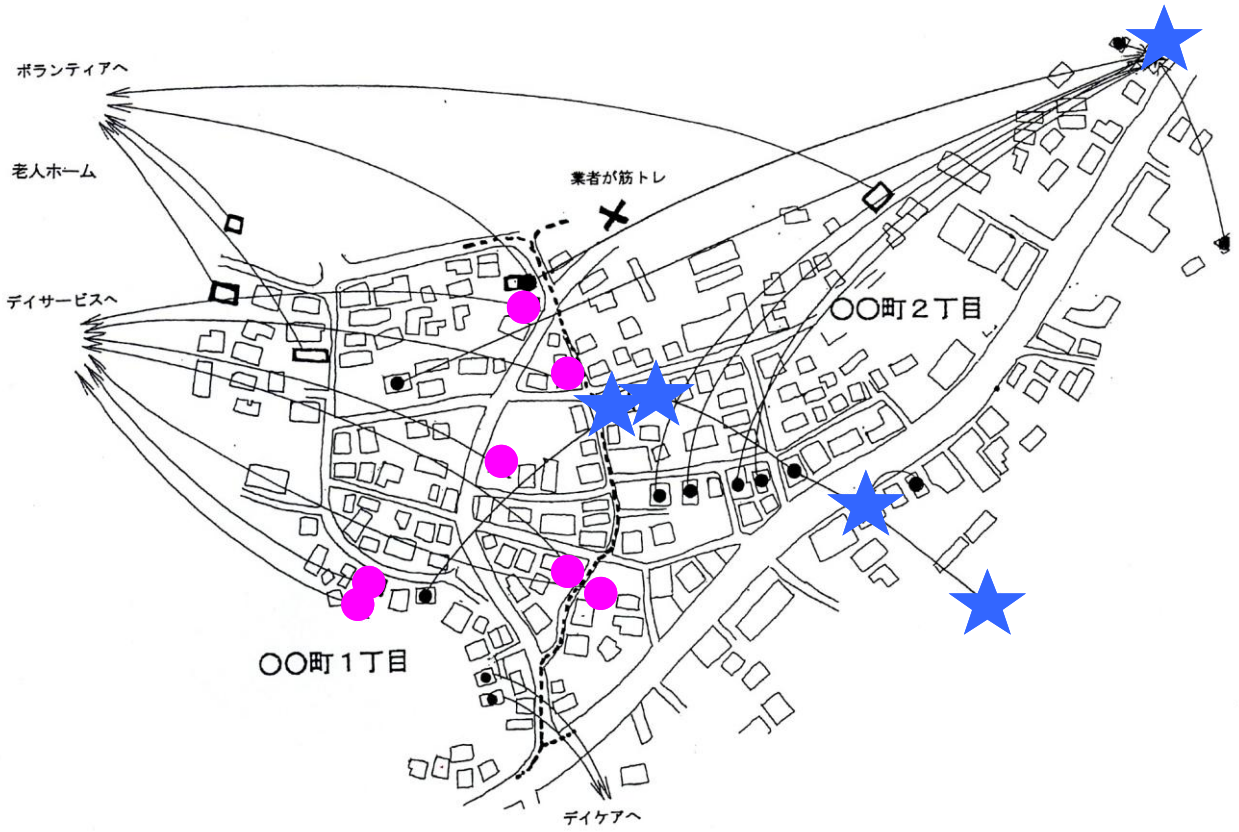
⑶デイサービス利用者

デイサービス利用者の１人から、こんな愚痴を聞いた。「私ね、嫁のためにデイサービスを利用してあげボランティアなのよ」。本人の意思に関係なく、デイに行かされている人も少なくない。

①デイに行かない日の充実した過ごし方を支援。
②デイを利用するとサロンに入れてもらえないことも。サロンと交渉。
③その人なりのデイ（畑仕事、趣味活動など）があるはず。それを復活させよう。

［デイに行かない人は井戸端会議を楽しんでいた］

点線から左側の人はデイサービスへ、右側の人は井戸端会議へ行っていた。



★…井戸端会議（サロン）

5.障害者

⑴在宅の重度障害者

　在宅の重度障害者が、地域でその人らしい仕事やお楽しみをもって、イキイキと生きている姿をあまりイメージできない。福祉作業所に通うのが唯一のスケジュールで、家に帰ってもやることがないと言う人が多い。作業所はそもそも、その人の能力を引き出し、それを開花させ、できれば仕事になるような役割を果たすものではないのか。

①福祉作業所の役割をもっと高度化し、１人ひとりの能力を掘り起こす。
②①が作業所でできなければ、教育機関や企業等で障害者の能力開発センターを。
③とりあえず、地域ごとに、今障害者が取り組んでいることを発展させる支援を。

［障害者の障害そのものを能力化］

細かい部分が気になる、何度同じことをやっても飽きないといった障害特性を能力とみなして、それを仕事にするという手法が広がっている。

⑵精神障害者

マップ作りをしていると、どの地域にも一定数いる精神障害者に対し、専門機関によって適切な対応がなされずに放置されているケースによく出会う。アルコール依存症の人が日中から酒を飲み続けて、そこに精神保健のワーカーが関わっているようには見えないなど。専門機関の人は市の中心部のセンターや病院にいるだけで、地域には出てこない。そして当事者が地域住民と小さないさかいをあちこちで起こしている。

①精神保健センターは、地域の末端まで彼らの知識と技術が生かされるようなシステムをつくれないか。
②その人材が枯渇しているとすれば、次善の策として、元保健師や看護師、あるいは精神保健関連のその他の人材を総動員して、小地域ごとのこの問題への対応策を考えるべきではないか。

［元保健師がいい役割を果たしていた］

ある地域で悩みを抱える精神障害者がいたが、マップで調べたら、近くに住む元保健師が相談に乗っていることが分かり、その元保健師を通して精神保健センターとつながり、その後はセンターが直接かかわってくれることになった。

⑶障害児

ある小地域でマップを作ったら、そこに様々な障害児がいることが分かった。視覚障害、聴覚障害、ダウン症、肢体不自由等。その子たちが地域の子ども会に入会しているのか尋ねたら、全員入会していないことがわかった。マップ作りは子ども会の母親たちと作ったのだが、その人たちは一様に「障害児も子ども会に入れるのですか？」と逆に聞いてきた。子どもならみんな受け入れられるべきだと言ったら、驚いていた。

①障害児も子ども会に入会させよう。
②入会した以上、イベントにも参加させよう。
③もっと子ども同士の交流をさせよう。障害児宅も訪問してもらおう。

問題の
解決策さがし
6つのポイント

1.当事者の側から考える

例えば、町内会に入る人が減っているという問題。大抵の関係者は、町民に積極的に入会を働きかけると言う。これは明らかに主宰者の立場から考えている。しかし町民は自分の都合で考えている。それは仕方のないことだ。

そこで、「町民はなぜ町内会に入りたがらないのか？」と考えてみる。
①負担金が高すぎる。②やらされることばかり。③それでいて、こちらに利益になることはない。④入らなくても困らない。

この１つ１つに応えていくのが、町内会の側のやることなのだ。

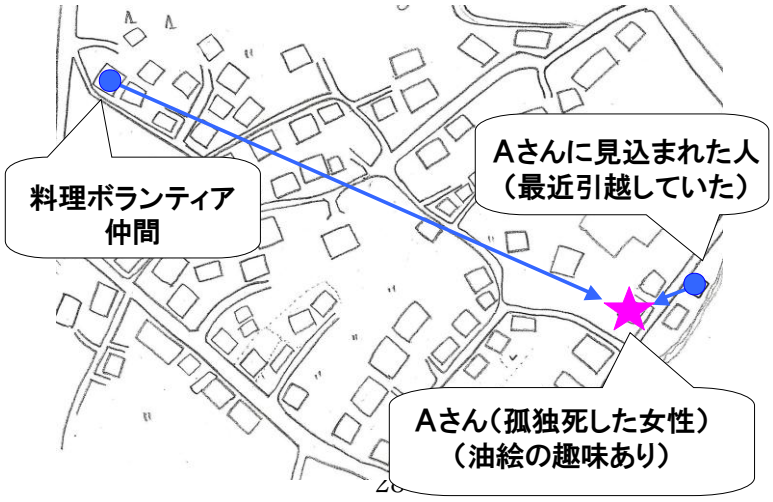
また、町内にカラスに餌付けをしている一人暮らしの男性が住民を困らせていた。こういう場合も、もしかしたら彼にもこういうことをする意味があるのではないかと、当事者の視点から考えてみるのだ。

2.当事者の自助努力を応援する

本人なりに解決努力をしている。助けてくれる人も自力で探そうとしている。ならば、それを尊重して、むしろ自助努力の後方支援に回るのが正しいあり方だ。最終的には、自力で助け手を確保できればいいのだから。

本人は自分の周囲に自助エリアみたいな空間を設けている。10～20 世帯程度だが、そのエリアを充実させるよう後方支援をするのが本来のあり方なのだ。

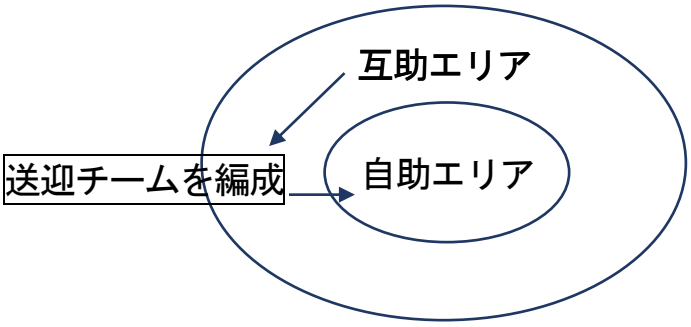
前述の通り、孤独死した一人暮らしの高齢者を調べてみたら、２人の支援者がいたが、特に親しかった斜向かいの家の人が引っ越していた。その人を通して支援していればよかったかもしれない。



3.互助エリアを充実させる

前項は、当事者本人がつくる自助エリアを充実させるのに手を貸すことであった。もう１つ、自助エリアの周辺に互助エリアができている。これが私の言う「ご近所」であるが、ここがその中にある自助エリアに欠けたものを補ってあげる役割を持っているので、この互助エリアを充実させれば間接的な自助エリアの支援になる。

例えば、だれか車で運んでほしいと当事者が願っているが、自分の足元の自助エリアには送迎をしてくれる人はいない。そこで互助エリアで送迎活動を充実させれば、その人材をその人の自助エリアに派遣することができるのだ。



4.本人の解決努力を尊重

問題を抱えた本人なりに、解決努力をしているはずである。それを調べて、その方向に沿った解決策を考えてあげる。

例えば外国人が日本人との交流がなかなかできないと嘆いているとする。そこで本人はそのためにどういう努力をしているのかを探ってみると、たまたま子供を同じ保育園に預けている女性と知り合いになっているという。

それなら、その保育園の親たちとの交流の機会をもっと探したらどうか。同じ外国人の親もいるかもしれない。

5.住民の解決努力に乗る

新旧住民の交流がなかなかできないと町内会長が嘆いていた。そこで住民は今、両者で何らかの交流を個人レベルでやっているのではないかと探ってみたら、①ガ

レージセールをしている、②犬の散歩友達ができている、③畑の貸し借りをしている、ということが分かった。ここから広げていけば、間違いなく交流はできるはずだ。

6.本人の尊厳を守る解決策か？

　災害が起きた時、小学校の体育館では、快適とはとても言えない避難生活になっている。そこで今、いろいろなアイデアが出されている。マンションの住民同士でふれあいイベントをして、仲良くなった者同士で、「うちは５階なので、１階のあなた、台風で水が来たらうちへ泊りに来ない？」とやっているところがある。仲良しの人同士が、そろって仲間の家に泊まると決めている例もある。３階建ての丈夫なコンクリートの家だという。避難先を決める場合、避難さえできればどこでもいいだろうというのではなく、本人の尊厳を傷つけないかを考慮する必要がある。